

短期大学新入生を実際の研究に参加させる試み(第2報)

——本学栄養健康学科における新しい初年次教育実践報告——

木 村 秀 喜

A trial of learning support system for students in Shimonoseki
junior college to join in research activities with a teacher
as the first-year experience (2)

— Report on a new education practice of the first-year experience
in Department of Nutritional and Health —

by

Hideki Kimura

キーワード：初年次教育、プレゼミ制度、地域活動、自主性

1. はじめに

平成18年度に短期大学における初年次教育として、筆者が本学紀要にて報告している「プレ・ゼミ制度」を実施した。その結果、積極的な学生の能力等を伸ばすことに成功し、クラスに活気を与えた¹⁾。

一方で、卒業年次のゼミナール及びボランティアにて、付属幼稚園との食育連携を行い、食育ボランティアを実施した。それにより学生の満足度、学習に関する意欲等が確認されたのである²⁾。

これらのことから本年度は、初年次教育を一層充実させ、かつゼミナール生にも影響を与えるために、学科全体で昨年度の取り組みを発展させ有機的に展開したものである。

したがって、対象となる学生は2年生を含むが、初年次教育充実を基にした昨年度の取り組みを基礎としたため第2報の教育実践報告とした。

なお、本取り組みは採択されなかったものの「平成19年度特色ある大学教育支援プログラム」に応募した。

2. 概要

当該取組は、平成18年4月から始めた初年次教育充実のための「研究お手伝い生」制度

(以後プレゼミとする)とウェルネス資格に必要なボランティア活動、従来から実施している2年次後期にあったゼミナールを学科全体及び教務委員会の協力の下にカリキュラム変更を含め組織的、計画的に再構築し、通年を通したゼミナールと初年次生を対象としたプレゼミ制度としたものである。

これは通年のゼミナールに地域活動を入れ、かつ1年生にも参加できるようにしたものである。

なお、参加した学生数はゼミナール22名、プレゼミ15名である。

2・1 教育課程上の位置付け

1年次のプレゼミは、単位を付与しない。2年次のゼミは通年の選択で単位を与える。

プレゼミに単位を与えないとした理由は、初年次に単位のための勉強ではなく、自主性を重要としたからである。したがって、ゼミは選択したからにはあるレベルの結果を要求するが、プレゼミは研究活動上の都合からある程度の開始時期、内容、結果に幅を持たせて、学生が大きな負担を感じ、やる気を失うことのないように各教員間で申し合わせている。

なお、11月に開催された桜山祭において、示説方式により中間発表した。ゼミナールについては、1月に発表を予定している。

2・2 募集及び手続き

初年次、2年次共に各ゼミナール活動の概要を示した印刷物を配布した。また、内容を知りたい学生に対して、同一教室で教員が共同の説明会を開いた。そこでは、各ゼミ担当教員が、資料を持ち寄り、希望する学生に対して、何度か説明を実施した。

その後は、各教員に対して空き時間に自由に質問、相談するものとした。

ゼミナールは登録をする必要性から、他の教科と同じ手続きをとる。また、ゼミナール、プレゼミを希望するものは、担当教員に4月13日までに申し出ることとした。

また、教員間の情報共有のため、各研究室教員により4月末に学科内の共有ドライブ上に参加学生名簿を掲示した。

2・3 各ゼミナールの概要

ゼミナールは、スポーツサポートゼミ、魚食推進ゼミ、食育ゼミ、ふれあいゼミの4つを開設した。

2・3・1 スポーツサポートゼミ (小・中学・高校生へのスポーツ栄養サポート方法の模索)

担当教員は現在、「スポーツ栄養士」として山口県下の各競技団体に栄養サポート活動を行っている。しかしながら、スポーツ栄養といっても栄養士に競技経験・知識が乏しかった

り、メーカーによる自社製品の宣伝で終わってしまったりする例も多く、機能しているとは言いがたい。基本に立ち返り、「スポーツ栄養とは何か」の視点からスポーツ栄養サポート方法を模索するものとした。

地域活動として、7月・12月に中体連の国体陸上強化合宿で栄養サポート活動、8月には県内高校強化合宿で栄養サポート活動を実施。

2・3・2 魚食推進ゼミ（魚食推進の模索と唐戸魚食塾への協力）

海外では魚食に注目し、各国の食文化に取り込みを始めている。反面、日本では魚食の消費は停滞している。関門地域にある栄養健康学科として、魚食を考えその推進方法を模索する。また、3年目を迎える唐戸魚食塾の実績をまとめ、運営の協力を行う。

地域活動として、ほぼ毎月実施される唐戸魚食塾運営ボランティアがある。

2・3・3 食育ゼミ（付属幼稚園の園児への食育活動の推進）

平成18年度より「食育ボランティア」を立ち上げ、園児への食育活動を実施してきた。その結果、園児への「食」への関心も広がってきている。今年度も「食育ボランティア」として、園児に「食の大切さ」や「食の楽しさ」について、さらに関心を深めてもらえるように、適切な内容を企画構成し、食育活動を推進していく。

地域活動は、夏季保育における食育活動（ゲームやお話など）、卒園前の「親子おにぎり作り」（実習）がある。

2・3・4 ふれあいゼミ（コミュニケーション手法の模索）

対象者（例、食事喫食者、患者様等）とのふれあいを目的に、食事に添えるバーステーカードや季節の小物類の手作りをする。単に買ったものを渡すのではなく、まごころのこもった手作りの媒体を対象者にプレゼントすることで心を伝える。そのことをきっかけとして話題づくりや食事指導につなげていき、医療や食事への理解を深めてもらう。

地域活動は、本学公開講座「おやじの味料理教室」の受講生との交流、地域医療機関等との交流がある。

2・4 教育効果をあげるために工夫した点

本学科の教育目標は、「しっかりと知識」、「美味しい料理をつくれる技術」、「人に優しい」の3つである。この目標を達成し、「地域で学び、地域で働くこと。」を目標として入学してきた学生のために、学外の人とふれあい、総合的なキャリア形成が出来るように考えたものである。

ゼミ、プレ・ゼミ制度は、各々課題に対する追求型学習によって、「しっかりと知識」を会得するものである。また、研究室での学生間の協力、地域活動は「人にやさしい」につながる。

これら本制度が持つ教育効果以外の工夫した点を次に示す。

(1) 課題に関する工夫

学生に興味がある事項をゼミ課題とした。子供が好きな学生向きに園児の食育、スポーツ好きにスポーツサポート、魚好きに魚食推進、臨床に興味がある学生にふれあいゼミと多方面でかつ興味を引くものを提示した。

課題内容として、「ふれあいゼミ」及び「食育ゼミ」は、特に「人に優しい」を意識したものである。「スポーツサポートゼミ」は、「しっかりとした知識」の面が強い。「魚食推進ゼミ」は「美味しい料理をつくれる技術」を会得できる。

このようにゼミの課題が学生の興味を引き、教育目標につながるように工夫した。

(2) 意義・価値を構成員が共有するための工夫

学科内では、全員が出席する学科会議で活動の都度に内容や進捗状況を報告している。また、半期毎に各活動の総括を各教員がまとめ、共有ドライブ上に掲示した。その結果を学科長がとりまとめをおこなった。

併せて、平成18年度の幼稚園の食連携やプレゼミ制度は、教育実践報告として、本学紀要に掲載した。また、スポーツサポートゼミ、幼稚園の食育連携ゼミ、魚食ゼミについては、その結果の一部を学会にて発表している。

平成18年度末には、学内全体の教職員会議で、FD・SDの一環として、本学科の他の取組と共に発表した。

これにより、学生が学科のどの教員に聞いてもどこの研究室で何を実施しているか回答できるようになり、またすべての教員は自身の実績をしっかりと把握するようになった。

(3) 設備・物品に対する対応

各研究室が狭いことから利用頻度が低い情報演習室を、多人数での打ち合わせやポスター作成などが可能な自習室兼ゼミ室とした。

この制度を始めるにあたり、新規に購入したものはない。6月頃より必要な品目を検討し、研究室のホワイトボード、持ち運び用スクリーン、自転車エルゴメーターなどを購入した。

3. 実施に対する評価

評価については、教員による評価、学生による評価、外部評価が考えられる。学生による評価は、他の授業を含めた授業評価を年度末に実施する。

3・1 教員による評価

実施に対する評価として、各研究室の教員及び学科長に桜山祭での発表後の11月下旬にヒ

アリング調査を実施した。ヒアリング内容は、総評、良かった点、悪かった点、効果、業務量である。その結果、すべての教員からほぼ同様の回答結果を得た。回答結果をまとめると実施効果、問題点、業務量に分けられるので、各々列挙する。なお、すべての教員が今後とも継続すべきとの意見で一致している。

(1) 実施効果

① 学生の自主性、協調性の発現

開始当初は、何をやっていいかわからない状態であったが、直ぐに学生間で話し合い、進めていく自主性が発現した。その自主性はゼミ内だけでなく、他の授業、活動にも反映されている。

そして、各活動を通じて共同性が生まれ、1つのことを協力して、すすめる満足感を得ていると思われる。

② 個性の発見

学生の持っている能力は、授業やテストだけでは把握しきれない。本制度により、多くの学生の個性を知ることが出来た。その結果、学生の良い点を引き出すことに成功したと考える。また、各々の個性を教員が認めることにより、学生が生き生きと様々な取り組みに関わったと考える。

③ コミュニケーションの充実

本活動を通じて、教員と接する時間が増えている。また、地域活動については、結果として教員も一緒に活動をしている。これらにより、学生と教員間でのコミュニケーションが充実したと考えられる。

④ 教員の学会発表、論文作成の充実

本活動を通じて、学生のために学会発表を早めたり、また活動内容を論文にした。これらについては、学生に対する効果だけでなく、教員側に対しても効果があったことになる。

(2) 問題点

① 地域活動に伴う移動手段の問題

地域活動のほとんどが、学外で実施される。そのために移動手段を確保しなければならない。

現地集合解散が可能な場合は、安全管理上の問題はないが、学生の交通費負担が大きい。特に夏期休暇中の活動は、通学定期が無いので多額になるケースがある。

学校等にて準備、集合後の移動は、安全管理上の問題がある。本学では、原則としてタクシー移動が認められないので、公共交通機関を利用することが困難な場合は、学校のバスにより移動することになる。しかし、このバスの運転は1人の教員しか運転が出来ない。そのためその教員の貴重な時間をいただくことになる。当該教員の時間単価及び業務処理の内容を考え

ると一般社会では許されない損害になる。また、本学が加入している保険内容を充実する必要があると考える。

② 募集に関する問題

今回が初めての制度であったので、適切な募集が出来たとは思えない。特に筆者のゼミは、ゼミ生5人に対して、プレゼミ生0である。本学科の取り組みを入学前から通知する等を検討する必要がある。

(3) 業務量

すべての教員から業務量が増加していない、あるいは初めてであるが気になる業務量ではないと回答を得た。これは予想外であった。すべての教員が、早い時期から自主性を優先させたことからの結果と考える。筆者だけがゼミ活動そのものは業務量増加につながらなかったが、自習室の確保や予算執行などで苦勞をした。

3・2 外部からの評価

外部からの評価は、アンケート調査等を実施していない。現場での意見をまとめると、非常に評判が良く、今後とも続けてほしいとの要望が高い。また、学生の地域活動を知った地域の医療機関から学生ボランティア派遣の依頼があった。

これらのことから外部からの評価は高いと考える。ただし、本当の外部からの評価は、「学生が社会に出た後に判る。」と学科長は指摘している。

4. 考察

本取り組みから感じたこと、考えたことを通して、本学及び地域の短期大学に必要な事項をまとめて考察とする。

4・1 わかりやすい授業からの脱却

FDの推進のために「わかりやすい授業」のみを優先する風潮がある。これは、FDが始まった頃の狭義のFDであり、誤っている。尾島は「良い教師は動機付けのできる教師」と指摘している³⁾。筆者は栄養指導論や外部の講演で「相手が変わらなければならないと思うような指導が行動変容につながる。」と指導している。有名な大学でも教員の指示が無ければ何もできない学生がいるようである。

それらを脱却するために高等教育の場においては、同一課題解決型のみでの教育ではなく、課題追求型の学習にも積極的に取り入れる必要がある。

本取り組みは、「わかる授業」から「積極的な学習」への変革につながる。

4・2 学生と触れ合うことの重要性

学生と触れ合うことの重要性については、多くの専門家が指摘している⁴⁾。プレゼミ制度は、入学直後から教員と触れ合うことができる。それにより学生と教員のコミュニケーションが早い時期から形成される。また、学生の行動が良く見えてくることにより、教育手法を検討し、教員間の連携も深まる。

4・3 地域活動の有効性

本学の総合科目では、一線で活躍される専門家にご講演をお願いしている。そのため、学生による評価は高い。しかし、それ以上に現場での実践は感動、驚き、感謝など強烈な印象を学生に与える。また、学生は地域活動といった発表の場を迎えるにあたり、適度な緊張感を持つ。

これらのことが学生に努力と喜びをもたらし、多くの学習効果を得ることになる。

4・4 地域に対する人材の育成

地方の短期大学は、「地域で学び、地域で働き、地域で生活する。」ことを使命としていると考える。そのため、地域に対する人材育成が重要になる。高等教育を修了した人材に求められることは、「一定の知識」と「課題を探索し解決する能力」、「社会性」などがあると考えられる。これらのことを会得するために、本取り組みは有効である。

そして、このようなことを学習した学生を地域に提供することが、地域再生の要因になると考える。

4・5 成功のためのポイントと今後の可能性

池森らは、工業高校の課題研究を成功させるための条件として、①生徒が興味・関心を持つテーマの設定、②生徒と教師が試行錯誤しながら一緒に取り組む、③発表会を設定し、ある種の緊張感を与えておくことの3点をあげている⁵⁾。これは工業高校の取り組みであるが、高等教育にも通じるところがある。本取り組みでは、①に対して、4つの興味を引くゼミを準備した。②は地域活動を通して、学生と教員が一緒に取り組んだ。③は地域活動により緊張感を持たせたほか、桜山祭やゼミ発表として発表の場を確保したところである。

したがって、本取り組みを成功させるためには、現在実施していることを検証しつつ、継続することで良いと考える。

また、職業高校から短期大学が、一つの人材育成のコースになるのではないかと、地域に有用な人材を輩出できるのではないかと期待する。

5. 謝辞

本取り組みに対しては、学科が一丸になり実施したので可能であった。また、学長の強い支持があったからこそ様々な取り組みができた。深く感謝いたします。

何よりも新しい取り組みに対して、ついてきてくれた平成17年度、18年度、19年度に入学した本学科学生に感謝する。

注

- 1) 木村秀喜：短期大学新入生を実際の研究に参加させる試み，下関短期大学紀要，25，95-103，(2007)。
- 2) 塩田博子・木村秀喜：幼稚園食育ボランティア活動の実施について，下関短期大学紀要，25，123-131，(2007)
- 3) 日本私立大学連盟編：教育から学習へ，大学教育・授業の変革と創造，東京，p.116，1999。
- 4) 日本私立大学連盟編：大学の教育・授業をどうする，東京，pp.204，1999。
- 5) 池森滋ら：創造性教育と課題研究，工業化教育法の研究，東京，p.244，2006。